
BittyHeart

妃炉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BittyHeart

【Nコード】

N5761T

【作者名】

妃炉

【あらすじ】

少年は、言った。

彼女を殺したのは僕だと。

少女は、誓った。

復讐を。

幼い頃、とても仲が良かった二人は、8年後、敵として再会することになる

笑いあり涙あり、協力プレイあり、恋愛ありの完全オリジナルストーリー。

原作よりも過去の話で、ソーディアンメンバーではリオンのみ登場（予定）。完全オリジナルストーリー&オリジナルキャラが多数出ます。苦手な方はお気をつけください。

この作品は自サイトの方にも掲載しております。

1話 盗賊団と客員剣士

1
願うことはただ一つ。

もう一度あの人に会って、真実を知りたい。

「おい！そっちに行つたぞ！」

「逃がすな！早く捕まえるんだ！」

けたたましく鳴り響く鐘の音が、非常事態だと告げている。

「捕まえられるなら捕まえてみるやーい」

その中で、闇夜に紛れて逃げ回っている者が一人。漆黒のフードとマントを身に纏い、景色に溶け込んでいた。

物陰にある階段に腰を下ろし、息をひそめる。その表情は、逃げることに躍起になっているようには見えず、むしろそれを楽しんでいるかのようだった。

「くそっ！どこに行つたんだ！」

「おい！早く見つけださないとリオン様に何を言われるか……！！」

リオン、という言葉に反応したのか僅かに眉を持ち上げる。だが、それはすぐに無関心に変わり、ポケットから取り出した時計に目を向けた。

途端に小さな物音が鳴り、アクアブルーの瞳が暗闇を睨みつける。しかしそこには誰もおらず、風が音を奏でているだけだった。

「さて、そろそろ……か」

小さく呟くと、被っていたフードを脱ぎ捨てる。露になった銀色の髪を夜風がさらうと、その者はほくそ笑んだ。

少年 いや、少女にも見える顔立ちをした者の名は「アルト」。
それが本名なのかは定かではないが、彼の周りにいる者たちは皆そう呼ぶ。年齢17にして盗賊の頭として君臨しており、その実力は折り紙付きだ。

「お前ら、ちやーんと逃げろよ?」

彼が仕切っている盗賊の団員は皆若く、無茶をしやすい。

アルトは苦笑を浮かべながら、誰もいるはずのない場所に声をかけ、空を見上げた。アクアブルーの瞳が月を探したが、今宵は新月。当然だが顔を出してくれる気配はないようだ。

まあそれは、彼らにとっても都合の良い事なのだが。

「派手に行きますか」

鞘から剣を抜刀すると、それを天に掲げ雷を呼び起こす。体力を多少消耗するが、どうせなら派手に一発ぶちかましてやろうと、彼は口角を持ち上げた。

「サンダーブレード!」

アルトがいる建物の少し後ろで一閃が走り、爆発音と煙が辺りに広がる。そしてざわめきと共に一人、また一人と兵士たちが集まって行く。

「やりすぎた……かな?」

掲げていた剣を鞘に収め、苦笑いを浮かべる。雷が落ちた建物から光が四方八方に広がると、それはすぐに消え去った。

作戦は成功したのだ。仲間はこの騒ぎに乗じて逃げ出すことができるし、なにより目的の物を破壊することができた。光が広がり、消えたのがその証拠だ。もうこんなところに長居する必要はないと言うように、マントを翻し踵を返した。

「貴様、そこで何をしている」

降ってきた声にアルトは足を止め、天を睨みつける。

先ほどは誰も捉えることができなかった場所に、影が一つ。聞き慣れた、剣を持ち直すような音が耳に入り、その影に目を凝らしたが、暗闇が顔を隠していて、人物を特定する事は難しく、アルトは心の中で舌打ちした。

声からしてまだ10代だろう。もしかしたら自分と同じくらいの年かもしれない。それが頭をよぎり、先ほど納めた剣を抜刀するのに躊躇っている。

「答える。僕は何をしているのかと聞いているんだ」

近づいてくる影と、傲慢な物言いに、アルトは深くため息をつき抜刀した。なるべく戦闘は避けたかったのだ。今回は依頼品を破壊する事が目的で、人を殺すのが目的ではない。なにより、年が近い上にセインガルドの兵士となれば、嫌でも昔のことを思いだしてしまふ。

「坊ちゃん、もしかして彼が……?」

「……僕はセインガルド王国客員剣士、リオン・マグナスだ。貴様、今回の首謀者だな?」

聞こえてきた二つの声に、アルトは目を見開いた。ここにいるのは自分と、目の前にいるリオン・マグナスと名乗る者だけ。

「お前……まさかエ……！」

一瞬悲しげな表情をしたアルトだったが、言い掛けた言葉を呑み込み、それを押し隠すようにニヒルな笑みを浮かべる。

思い出してはいけないのだ。自身で封印した過去を。たとえそれが、一番会いたかった者たちの事でも。

アルトの心中は、悲しみと、戸惑い、そして嬉しさが入り交じっていた。

「ふん、黙るか」

否定も肯定もしない彼に、リオンは剣先を突きつけ、鼻で笑う。

「大人しくしている」

「……嫌だね」

アルトは、リオンが持っている剣を自身の剣で弾くと、すかさず後ろへ飛んだ。

反抗された事に驚いているのか、はたまたいとも簡単に距離を取られてしまったことに驚いているのか。リオンは一瞬目を見張ったが、それはすぐに苛立ちに変わっている。

その姿を捉えると、楽しそうに口角を持ち上げた。

「俺はアルト。お前の言ってたとおり、今回の件は俺が計画した。

まあ、さらさら捕まる気なんてねえけどな」

体勢を整え、剣を構える。細身の刀身が暗闇でも怪しく光っていて、その剣先はリオンを捉えて離さない。じりじりと間合いを詰めるが、さすが客員剣士と言ったところか。なかなか隙を見せてはくれないようだ。

「……あ、そつだ」

アルトは思い出したかのように、ポケットから時計を取り出して視線を向ける。確か集合時間は騒ぎが起こってから20分以内のはずだ。それより遅れた者は誰であろうと切り捨てる。たとえばそれが、頭だとしても。

「遅れたらシャレになんねえ……」

自分自身で作った掟にため息をつきながら、アルトは時計を元の場所に押し込んだ。

「どこを見ている!」

その隙を狙って剣を掲げたりオンだったが、またもや簡単に防がれてしまう。苦虫を噛み潰したような表情でアルトを睨みつけると、彼は嘲笑うかのように、口角を持ち上げた。

「なあ、俺行くところあんだわ。そこ、退いてくんない?」

「貴様ふざけているのか? 退くわけないだろう!」

飄々としたアルトの態度が癪に障ったのか、リオンは苛立ちを隠せない。勢いに任せて剣を振るうが、先ほどと同じように弾かれた。攻撃を防がれたことよって、アルトをさらに鋭く睨みつける。オンに当の本人はお構いなしだ。ため息をつき、面倒くさそうに剣

を持ち直す。

「ふん、ようやく捕まる気になったか」

「お前は俺に勝てないよ」

迷うことなく放たれた言葉に驚いたのか、リオンは目を見開いた。だがそれはすぐに消え去り、剣を自身の前に構える。

「笑止。僕に勝てると思っているのか？」

リオンは鼻で笑い、アルトに切りかかった。

「お前と俺じゃあ背負ってるモンが違うんだよ」

それを簡単に受け止め、力任せに押しやれば、小さな呻き声と共に、剣が軽くなる。

リオンを見やると、数歩後ろに下がり、勢いよく地面を蹴り出していた。苛立ちを隠しきれず、躍りになっているようにも見える。

「貴様……っ！」

『坊ちゃん！落ち着いて！』

次々に繰り出される剣技に、アルトは軽々と受け流す。終始笑顔のまま、剣を操っていないもう片方の手で時計を探し、目を移した。

「……残念、もう少し遊びたかったんだけどな」

深くため息をつき、まだ睨みを利かせて剣を振るうリオンに視線を戻す。

「タイムリミットだ、客員剣士様」

そう言い放つと、瞬時にリオンの懐へ柄を叩き込み、後ろへステップする。すぐに先ほどよりも苦しそうな声と、地面に倒れ込む音がアルトの耳に届き、彼はニヒルな笑みを浮かべた。

未だに剣を握りしめ、睨みを利かせているリオンに一瞥をくれてやると、何も言わずに背を向ける。急がないと、本当に置いて行かれてしまう。これでは頭の名が台無しだ。

剣を鞘に収め、リオンの制止する声に耳を貸さずに、その場から立ち去った。

「会いたかったけど、会いたくなかったよ……エミリオ」

歩を進めながら呟いた小さな声は、風に消されていった。

時間内ギリギリに約束の場所へたどり着いた時は、既に皆集まっていた。呆れ顔で頭の到着を待っていた。特に補佐をしているエルフオードからは、ため息と同時に頭を軽く叩かれ、アルトは苦笑いを浮かべた。

「遅い」

「……ごめん、エル」

エル、と呼ばれたアルトよりも少し上に見える青年は、素直に謝った彼に一瞬驚いたが、嬉しそうに彼の頭を撫でる。

そしてすぐに「戻るぞ」と言い放ち、アルトの代わりに指揮を執った。

彼らの住処は転々と変わってゆく。盗賊という職業柄、兵に追われている身であるというのも確かだが、何よりも拠点を一つにして

しまつと依頼がやりにくくてしょうがないのだ。

少人数で大きな仕事もこなしてきたので、資金もたんまりとある。とりあえず今日は皆疲れているので、アルメイダからそう遠くない、森へ向かう。存在があまり知られていないので、彼らにとって住居にするのに最適な場所だ。

「アルトさん、遅かつたつすね！何かあつたんすか？」

「まあ、ちよつと……な」

部下に声をかけられたアルトは、曖昧に返事をし顔を曇らせる。だがそれはすぐに直され、先頭を歩くエルフォードの横に並ぶように歩みを進めた。

「……リオン・マグナス、か」

皆が寝静まつた頃、一人空を見つめていたアルトの呟きが、静寂を破った。屋根に背を預け、自分の口から出た言葉に驚き苦笑する。まさか、無意識に考えているなんて。あれほど頑なに封じていた記憶がたつた一人……いや正確に言えば二人のせいで、鮮明に蘇ってくる。

アルトはそれを消すかのように頭を横に振り、体を起こした。

「珍しく考え事か？」

「……ああ」

視線を声がする方へ向けずに、アルトは俯いたまま返事をする。

近くに居るのは気づいていた。今のアルトみたいに夜空を仰ぎ見ているのを時々目にするし、各々の報告が終わった後、すぐさま外に出て行った姿も見た。なにより、わざと気配を隠さずに近づいてきたのだ。

「何考えてるのか、当ててやるのか？」

エルフォードはアルトの右側に腰を下ろすと、続けて口を開く。

「10年前に裏切られたアイツらの事だろ？お前の両……」

「エル！」

反射的にアルトは叫んだ。聞かれない事だったからなのか、「裏切り」という言葉に反応したからなのか。はたまた別に理由があるのか。

今にも泣きそうな表情をして、エルフォードを睨みつけている。

「その話は、嫌だ」

「アルト、お前は……」

エルフォードは言い掛けた言葉を飲み込んで、口を嚙んだ。これ以上言ったらまずいと思ったのか、一息ついて彼の頭を軽く叩く。

「はいはい、悪かったな」

「……思い出したくない。考えたく……、ない」

アルトは首を横に振り、右手でエルフォードの裾を掴んだ。だんだんと込められる力に、服を握られてしまった本人は苦笑を漏らし、頭を撫でる。

普段が頭というポジションにいて大人ぶっているせいか、あの時の話が出てしまうと、彼はひどく幼く見えてしまう。まるで、闇に蓋をして溢れ出ないように、必死に自分に言い聞かせて。

「……いつかは踏ん切りつけろよ。俺の為に」

「……？」

アルトの耳に、エルフォードの弦きは届いていなかったらしく、聞き返すように首を傾げた。

「もう遅いから帰るぞって言ったんだよ」

「そっか、了解」

作り笑いを貼り付け、アルトは立ち上がる。それに気づいているのか、いないのか。複雑な笑みを見せ、エルフォードもあとに続いた。

2話 男の嫉妬とミニスカート（前書き）

今回はオリジナルキャラしか出ません……！

2話 男の嫉妬とミニスカート

2

辺りは真つ暗だった。一点の光もなく、ただただ、闇。

どこからか声が聞こえる。誰かの叫び声、泣き声、そして笑い声。その主が誰かはわからない。わかるのは、これが現実ではないという事だけ。

しばらくして、二つの声が止んだ。未だに聞こえる笑い声も、足音と共に、消え去った。

真つ暗で無音な世界だけが、そこにあった。

「……っ！」

目を開けると、広がったのは闇ではなく、弱々しい光だった。アルトはまだ荒い呼吸を整え、額の汗を拭う。

封印したはずの記憶が、昨夜のせいで一気に呼び起こされている。最悪な夢だと小さく呟き、起き上がって隣にいる皆を見回した。

どうやらまだ誰も起きていないようだ。規則的な呼吸といびきが聞こえてくる。

10代ばかりの盗賊団「クリオス」は、孤児院出身者もいれば、勘当されてこの団に入った上流階級出身者もいる。

盗賊団といっても、何も盗みだけをしているわけではない。依頼があれば、許容範囲のことは実行してきた。年長者はエルフォードで、もう一人の20代は唯一の女性だ。団員が少ないために喧嘩も多々あるが、いつの間にかお互いけりりとしている。

そんな彼らをまじまじと眺め笑みを浮かべたアルトは、静かに部屋を出た。

まだ薄暗い景色から、エルフォードと共に部屋へ戻って数時間しか経っていないことが伺える。リビングで椅子に座り、ぼんやりと窓の外を眺めていると、扉の開く音が聞こえた。視線をそちらに向けると、髪の長い少女が一人。

「おはよう、早いね」

「ちよつと嫌な夢をね。ピスカこそ、早いな」

視線をピスカから外し、もう一度景色を見て溜め息を一つ。カタリ、と音のする方向に目を向ければ、向かい合うようにピスカが腰を下ろしていた。

「アルフェイス、ひどい顔よ？」

「ピスカ、“俺”はアルトだよ」

即座に訂正してやれば、彼女は悪戯な笑みを見せた。そうね、と一言呟き、先程アルトがいた部屋に視線を向けている。同じようにその方向を見やれば、アルトも納得した声を出し、視線をピスカへ戻した。

「ねえ、今日暇かしら？」

「んー簡単な依頼しか受けてないから暇といえば暇だよ」

アルトの返答にピスカは満足そうに笑みを浮かべる。何事かと尋ねれば、彼女はちらりと部屋に視線を向け、さらに口角を持ち上げた。

「デートしましょう」

「なっ」

ピスカの言葉を、反射的に返したのはアルトではない。当の本人は、小さく唸り何やら物思いにふけっている。おそらく代わりの者を思い浮かべているのだろう。

今日の依頼は護衛が主で、皆目的地にも行ったことがある。だからわざわざ頭が請け負う必要はないし、折角のピスカからの誘いを無下にもできない。

「エル、良い？」

少しして口を開いたアルトは、視線を先程声がした方向へ向けた。ドアが開いて出てきたのはやはりエルフォードで、けだるそうに二つ返事をした。アルトよりも短めに切りそろえられた黒髪を乱暴にかき、未だに微笑みを崩さないピスカを睨みつける。

「ピスカ、ためえ覚えとけよ」

「あら、何の事かしら？」

わざとらしく首を傾げたピスカにエルフォードは僅かに眉を持ち上げる。状況をよく理解していないアルトは、いつものように喧嘩を始めた彼らに苦笑いを浮かべた。

「何がデートだ、ふざけるな」

「恋人同士がデートするなんて、自然な事よ。ねえアルト？」

エルフォードはピスカに耳打ちして話をするが、彼女はその行為を無駄にするように、『恋人同士』を強調して声のトーンを上げた。しかもアルトに同意を求めるといふ、エルフォードからしたら嫌がらせ以外の何でもない事を、あっけらかんとしてしまう。

「え……ま、まあそんなんじゃないか？」

不意に投げかけられた言葉に、思わずもってしまつたアルトは、まだ不服そうにしているエルフォードに目を向ける。ピスカも同じように彼を見つめ、二人の視線を受け取つた本人は、怯んだように溜め息をはいた。

「……門限は5時だ」

「嫌ね、男の嫉妬つて見苦しいわよ」

即言い放つたピスカの言動に、エルフォードはわなわなと肩を震わせ拳を握りしめる。いつもはクールな彼なのだが、ピスカが絡むとどうもそうはいかないらしい。

そんな二人を目の前に、アルトはもう一度苦笑いを浮かべ間に割つて入つた。

「はいはい、ストップ。これ以上騒いだらみんな起きちゃうだろ。」

ピスカ、エルで遊ぶのはそれくらいにしといて。エルもいちいち反応しないように

「つまらないわ」

ピスカはテーブルにひじを突き、笑みを崩して外方そっぽを向いた。アルトはそんな彼女の前に行き、視線を合わせるようにしゃがみ込む。髪と同色の黒い瞳を見つめるが、なかなか合わせる気配はないようだ。

「ピスカ、今日どこへ行く？俺、結構楽しみなんだけど」

一息ついてアルトが微笑んで問いかけると、彼女は一瞬目を見張り、また嬉しそうに笑みを浮かべた。そんなやりとりを見ていたエルフォードは、小さくため息をつき、テーブルにある紙に視線を向

けた。

「ネイに報告して終わりか？」

「ああ、よろしく。エル、ありがとな」

エルフォードは先程の紙をアルトの目の前に持って来、返答を受け取るとすぐさまポケットへねじこんだ。

ネイ、という人物は依頼をこちらに提供してくれる、いくなれば依頼者との窓口だ。相手を指定していない依頼などは、彼女の店で受けることができる。固定の住所を持たないクリオスは直接依頼を受けると言うよりも、依頼をネイ経由で受理する方が多い。

「アルト、あと4時間後に迎えに行くわ。アレ、よろしくね？」

ニッコリ、という音が聞こえそうなくらい微笑んだピスカは、「アレ」と聞いて顔を真っ青にしているアルトを余所にして、リビングから立ち去った。

「アレって何だ？」

別の部屋へ入っていくピスカを見つめながら、エルフォードは首を傾げ尋ねた。だが、未だに顔色が戻らない上に、その場に崩れ落ちているアルトを見ると、これ以上追求しない方が良いと思っただけ。小さく咳払いをして、「寝る」と一言呟き戻って行った。

「ピスカ……アレは嫌だよ……恥ずかしすぎる」

半泣き状態のアルトの声は、誰の耳にも届くことはなかった。

「ピスカ、もう帰ろうぜ……」

「アルフィス、言葉遣い」

「うう……」

あれからあつという間に4時間が経過した。迎えにきたピスカが、アルトの格好を見て顔をしかめ、上下の服を取り替えるのは、毎度のことだ。

彼女が言っていた「アレ」というのは、女性らしい格好をするということ、普段男の格好をしているアルトからしたら恥ずかしい以外の何でもない。ぶつぶつ文句を口にしながらも、言われるがままに着替え、彼女の手によって肩まである銀色の髪を後ろで一つにまとめられた。そしてさらに、蝶の髪留めまでセットされ、現在に至る。

今のアルトはどこからどう見ても少女だ。ミニスカートに慣れていない彼、いや彼女はおぼつかない足取りでピスカの後を歩いて歩く。腰にぶら下がっている剣が多少違和感を与えるが、今のアルトにはそれを気にする余裕もなかった。

ミニスカートも、極端に胸元が開いた服も、アルトからしたら堪え難い格好なのに、似たような服を着て隣を歩くピスカはえらく楽しそうだ。

「きゃー！……様よ！」

「……だわ！私一目で良いから……たかったの！」

「しかもお一人じゃないわ……」

ダリルシェイドへ着いた途端、上の方からざわめきと共に黄色い声が飛んできた。所々聞こえなかったが、どうやら誰かが来ているらしい。

アルトは興味なさげにその方向を見やり、渦中の人物を発見すると小さく声を漏らした。ピスカが自分の後ろに隠れたアルトへ不思議

議そつに視線を向け、声をかける。

「どうしたの？」

「あいつ……昨日戦った奴だ。確か、リオン・マグナスって……」

リオンから視線を離さずアルトは、ピスカに返答する。

やはり先ほど女の子たちが騒いだように、彼は一人ではなかった。メイド服を着た髪の長い女性と並んで歩いている。女性は反対側を向いているので顔は見えないが、彼は昨晚よりも、とても穏やかな表情を浮かべていた。

アルトは胸の位置に手を持ってきて、心臓を押さえるかのように服を握りしめた。視線をリオンから外し、目を伏せる。

そんな姿を横目で見ていたピスカはリオンに視線を向け、すぐに戻すと、口角を持ち上げた。

「後をつけてみましょう」

「は？」

ピスカの唐突な発言に目を丸くしたアルトは、微笑みを崩さない彼女を見て首を傾げる。

「だから、尾行するのよ」

平然と言つてのける彼女は、先程よりもずっと楽しそうだ。まるでエルフォードをいじっているような、そんな感じでアルトに笑みを見せている。

「気になるんでしょう？昔馴染みのこと」

「なんで……、それを？」

ピスカの言葉にアルトは再び目を見張った。

何も言っていないはずなのに、彼女といいエルフォードといい、どうしてわかってしまうのか。

「愛しそうに見つめてるからよ」

「ちが……！」

ちがう、そう口に出そうとしたが、ピスカによってそれは制止されてしまう。

「違う。表情見たらわかるのよ。彼があの子の男の子なんだって」

刺さるような視線に耐えきれず、アルトはピスカから瞳をそらした。下を向いて、握っていた手に力を込め、声を絞り出す。

「……久しぶりで、ただ懐かしくなっただけ。“愛しい”なんて、これっぽっちも思っていないから。そんなものは……」

「計画の邪魔になるから、切り捨てる？」

「ピスカ……」

思っていたことを即座に当てられ、さらにそれに賛同していないピスカの態度に、アルトは弱々しく彼女の名を呼んだ。彼女やエルフォードは、わかってくれると信じていたのだ。

「すべてを憎んで、すべてを消す？それで、楽になるの？」

「ピスカ！」

先程よりも大きな声で彼女の名を叫ぶと、周りが何事かと騒ぎ始めた。

しかし彼女は平然と同じトーンで話を続ける。アルトは耳を塞ぐうとするが、ピスカの手によってそれも阻まれてしまう。

「私はエルフォードのように甘くないの。貴女が私を憎んでも、私は全力で貴女を止めるから」

「もう……やめてよ！」

「復讐なんて、させない。絶対に」

「……！」

駄目なんだ。蓋をしなくちゃいけないんだ。俺はアイツを……、エミリオを憎まなくちゃ、前へ進めない。俺の両親を殺したアイツの親父を、この手で殺すためにも。

俺は、過去の呪縛から逃れたいんだ。わかってよ、ピスカ……

想いを口に出すことが出来ず、アルトは唇をかみしめた。

2話 男の嫉妬とミニスカート（後書き）

誤字・脱字・感想など頂けると、とても励みになります！

3話 再会と予感 前編

3 - 1

「復讐なんて、させない。絶対に」

目の前の黒い瞳が、アルトを鋭く捉える。彼は未だピスカの視線から逃げていて、合わす気配さえない。ただただうつむいたまま、握りしめた手に力を込める。

「本当はわかっているんでしょう？無意味だって」

口を開かないアルトを無視して、ピスカは話を続ける。先ほどの大声で周りがどよめいているが、そんなのはお構いなしだ。

納得していないような表情を浮かべたアルトを見て、彼女は小さく首を横に振った。一瞬、どこか悲しそうに目を伏せたが、それは瞬時に戻されてしまう。

24

「アルフィス、憎むのはすごく楽なことだと思うわ。でもそれは、逃げてるだけじゃないの？自分が辛いから、苦しいからそれを憎し……」

「そんなこと……！」

ピスカの言葉を遮って、肩を震わせながらアルトは絞り出すように声を発した。

「そんなこと、自分が一番わかっているよ……でもっ、俺は……私はっ！」

「何の騒ぎだ！」

だがそれはすぐに別の声によって制止され、二人の視線は導かれるように声がする方へ移る。

アルトよりも、ピスカよりも小さい体に、幼い声。風にさらわれ、ひらりと桃色のマントが舞った。それは昨夜も、先ほども、目にした人物。

「貴方は……」

「エミ……リオ……っ」

小さく呟いたアルトの言葉は、ざわめきにかき消され、隣にいるピスカ以外の耳には届かない。それを良いことに、彼は即座に口を堅く結び、表情を消した。

リオンはマントをなびかせ、足早に二人がいる方向へ歩みを進めている。瞳に苛立ちを浮かべ、腰にある愛剣・シャルティエを手にとった。

「貴様らか、この騒ぎの原因は」

『坊ちゃん、相手は一般人ですよ！』

睨みを利かせ剣先を向けたリオンに、もう一つの声がなだめるように言葉をかけた。アルトはその声に反応を見せることなく、顔を見られないようピスカの後ろへ隠れた。

「ごめんなさい、ちょっと喧嘩しちゃって」

ピスカの返答にリオンは鼻を鳴らし、シャルティエを下げると、未だに顔を見せないアルトを一瞥する。

「おい貴様、顔を上げる」

凜とした声が響き、アルトは瞬間的に身をこわばらせた。恐る恐る顔を上げ、声の主に視線を向ける。ぶつかったのは一瞬だった。だが、リオンの紫水晶の瞳は、合わせただけで何もかも見透かされてしまいそうになる。アルトはまたすぐに瞳を逸らすと、今度は周りに集まっている人々の中にいる彼女を見た。

「（やはり、あれはマリアンだったのか）」

黒髪のメイド服を着た女性は心配そうにこちらを見ている。無論、視線の先は客員剣士様なのだが。

『アルフィス……!?!』

「……いや、そんなはずは」

自分の本名を呼ばれ瞬間的に振り向いてしまったアルトは、驚いて目を見張っているリオンと視線がぶつかった。彼の本名を呼んだのはリオンではなく、シャルティエで、聞こえていないフリをしてしまえば、単に振り向いたようにしか見えない。だが彼は、十数年前にこの街を去った自身を、リオンとシャルティエが覚えている事に驚き、視線を逸らすことが出来なかった。

『やっぱり君は……!』

「シャル!」

「……!?!」

リオンの大声で我に返ったアルトは、瞬間的に視線を他へ向けた。その先にいたのはピスカで、彼女は困った表情を浮かべているアルトを見て小さく笑った。

先ほどの剣幕はどこへいったのか。今の彼は盗賊団「クリオス」の頭には到底見えない。己の手を、相手の血で染めるくらい造作も

なく無表情でやってのける彼が、今はどうだろう。ひとりの少年の言葉で、こころを揺れ動かしてしまうとは。

ピスカはリオンに一瞥をくれると、アルトの手を握り笑みを作った。

「ごめんなさい。この子気分が悪いみたいだから、もう失礼しても良いかしら？」

「……ああ、もう騒ぎを起こすんじゃないぞ」

ピスカの問いに、一拍おいてリオンが答えると、彼女は複雑な笑みを浮かべ、頷いた。

そしてアルトの手を引き、見物者の脇を足早に通り過ぎてゆく。騒ぎの中心人物がいなくなると、街の人間はすぐさま散り散りになる。ただ一人、先ほどリオンと一緒にいた、メイドのマリアンだけは、彼が動くのを待っていた。

『坊ちゃん、あれはアルフィスですよ！』

「……違う」

愛剣を目の前に持って来、コアクリスタルを悲しげに見つめるリオンに、シャルティエは声を上げた。

『僕の声にも反応しましたよ！』

「違う！あれは……アルフィスなんかじゃない」

それでも尚、否定し続ける彼に疑問を抱いたシャルティエは、小さくマスターを呼ぶと、コアクリスタルを点滅させた。リオンは剣の柄を強く握り、唇を噛みしめた。

「……彼女は、僕が殺したのだから」

彼は弱々しく言葉を紡ぐと、手のひらで顔を覆い、瞳を閉じた。

「ごめん、ピスカ……っ！」

「アルフィス!？」

リオンの姿が見えなくなると、アルトは繋がれていた腕をふりほどき、一目散に走り出した。驚くピスカに目もくれず、ひたすら風を切った。

走って、走って、走ってたどり着いたのは、彼らがアジトにしている森を抜けた先だった。

切り立った崖の上で足を止めたアルトは、肩で息をし両手をついて座り込む。視線を落とすと、青々とした若葉が目に入り、彼はそれを握りつぶした。

ピスカに痛いところを突かれたせいか、「アルト」ではなく、「アルフィス」になっていたせいか。たった一言。ただ、名前を呼ばれただけなのに、こんなにも心をかき乱されるとは。

アルトは血が出るほどに唇を噛むと、結ってあった髪を乱暴にほどいた。

「……いまさら、なんだって言うんだ。あいつは、俺の復讐相手ではない」

息を整えている間に落ち着きを取り戻したアルトは、地を睨みつけ、ぼそりと呟く。まるで、自分自身に言い聞かせるように、ゆっくりと。

その瞳は、先ほどとは違って変わって何の色も宿していなかった。ただ、睨みつける瞳がひときわ鋭くなっている。

「もう……終わりにしよう」

そう言って彼は口角を持ち上げた。

3話 再会と予感 前編(後書き)

誤字・脱字・感想など頂けると、とても励みになります！

3話 再会と予感 後編

3 - 2

あの日は、太陽が隙間から顔を覗かせているわけでもなく、真っ黒い雲から雨が降り注いでいるわけでもなく、ただただ、黒い空が広がっていた。イスの上で背伸びをしながら、ガラス越しに見た空はとても不気味で、アルトは身を縮めた。

なんだか、嫌な予感がする。昨日の夜から胸騒ぎが収まらない。両親が帰って来ないなんてよくある事なのに、どうしてこんなにも不安に駆られるのか。

まだ少女の格好をしていたアルトは、イスから降りると一目散にドアへ駆け出した。だが、ひらりと舞ったスカートが、イスの木の部分に引っかかり、彼女の足を止めてしまう。普段なら丁寧に外すのだが、今日はそんなことをしている暇がないというように、力強く裾を引っ張った。布が破れる音が聞こえたが、それを無視してもう一度駆けだした。

「お父さん、お母さん……どこ？」

まだお昼過ぎだというのに、街には明かりが灯っている。街中には店をやっている者以外、ほとんど人がおらず、どうやら皆家にもっているようだった。

その中でひととき目立つ大きな屋敷に、自然とアルトの足は向かっていた。

「すみません、父と母、いますか？」

「ラファエラ先生なら、ヒューゴ様と研究室に向かったわ」

ドアをノックして暫くすると、メイド服を着た女性が出てきた。

アルトは用件を簡潔に述べると、その女性は、笑顔で答えてくれた。一礼してアルトも笑みを浮かべると、すぐさま踵を返し、その場から逃げるように、再び走り出した。

胸騒ぎがおさまらない。両親に何かあったのでは、と嫌な考えが彼女の頭をよぎった。

研究室の前にたどり着くと、いつも偉そうに立っている門番の姿はなく、代わりに血を流して倒れている姿があった。

「なに……これ……」

鉄の錆びた臭いがアルトの鼻を突いた。思わず口に手を当て、涙ぐむ。

やはり、何かが起こっている。叫びたい気持ちを抑え、彼女は事切れている兵士に一度目を向ける。そして、祈るように数秒間瞳を閉じると、再び歩み始めた。

中へ入ると、研究室は異常なほど静かだった。まるで、外界からここだけ切り離されたような、そんな錯覚さえしてしまうほどに。

アルトはなるべく足音をたてないように、両親の部屋へ続く階段を下りていく。

先ほどの門番たちは、仮にもセインガルドの兵士だ。そう簡単に殺されるはずがない。いったいこの研究室で、何が起きているのだろうか。両親は無事なのだろうか。

彼女の頭の中は、それだけでいっぱいだった。だから、気がつかなかったのだ。彼女の後ろをついてきている影に。

両親が使っている部屋の前まで来ると、そこには明かりが灯っていた。わずかに話し声も聞こえていて、アルトは心を弾ませた。両親が無事だと確信した彼女は、嬉しそうに笑みを浮かべドアを叩く。

「お父さんお母さん、私、アルフィスだよ。開けて」

「……………」

何の返事も無い。彼女は首を傾げ、もう一度両親を呼んだ。
だが、やはり返事はない。不思議に思い、取っ手を回すと、扉は静かに音を立て開いた。オレンジ色の光がアルトの目に飛び込み、そして先ほども嗅いだ臭いが、鼻を突いた。

「どうして……お父さん、お母さん……！」

そこには、見知った男と、血を流して倒れている父と母がいた。
アルトは二人に近づき、母の身体を揺さぶった。何の反応もない。呼吸さえしていないのだ。体は冷たく、周りに広がっている血の海は、所々固まっていた。彼女は涙をこらえ、隣にいる父にも同じ事をした。だが、結果は母と同じで、もうすでに息を引き取っていた。

「なん……でっ」

「私が来た時には、もう手遅れだった」

死んでいる二人の側で両親の名を呼ぶアルトに、男は一瞥をくねると、倒れている二人に冷ややかな視線を向けた。

「アルフィスくん、だっかな？」

「は、い……そう、で……す」

俯いたまま、アルトは口を動かした。堪えていた涙が出てきてうまく言葉が繋がらない。男はゆっくりと彼女の元にくると、慰めるように頭を軽く撫でた。

「ヒューゴ……様」

アルトは涙を拭くと、安心した表情を浮かべ、ヒューゴの顔を見

つめる。

「先ほど兵にも連絡をしておいた。アルフィスクン、ここは危険だ。君は上へ」

彼女はその言葉に反発しようとして口を開いたが、それより先にヒューゴの冷ややかな視線が突き刺さった。

「早く行きなさい」

幼いながらに恐怖を感じたのか、彼女はゆっくり頷くと、もう一度両親に視線を向けた。真っ白だった白衣は赤に染まり、父の綺麗な銀髪も、赤黒く染まっていた。

アルトは立ち上がり、後ろ髪を引かれる想いで、入ってきたドアへと足を進める。おぼつかない足取りで部屋を後にし、手すりに支えられながら、階段を上った。

研究室から外に出ると、血痕は残っているものの、兵の姿は見当たらなかった。ヒューゴが言ったように、駆けつけた兵が弔いのため、移動したのだろう。

「アルフィス……」

ふと、聞き慣れた幼い声が、先ほどまでいた研究室から、アルトの耳に届いた。

「……お父さんとお母さんが、ね。　たくさん血を流してたの」

彼女は振り返ってその人物を見つめると、無表情で研究室の方向へ歩みを進めた。

「……ねえ、どうして？どうして、殺されたの？　ねえ、答えてよ……」
「……エミリオっ！」

彼女は少年のすぐ側まで寄ると、枷が外れたかのように、彼にすがり、泣き叫んだ。エミリオ、と呼ばれた少年は、アルトよりも数歳幼く、背だつて彼女の肩ほどしかない。

だが彼は、急に声を張り上げ、泣き出したアルトに驚くわけでもなく、彼女を残して逃げるわけでもなく。ただただ、黙つたまま彼女を受け止めていた。

「……ごめん、エミリオ」

ようやく落ち着いたので、アルトは涙を拭いて、笑顔を浮かべた。

「無理に笑わなくていい」

「……っ」

リオンのその言葉に、アルトの瞳が潤んでいく。先ほどたくさん流したはずだというのに、いつまでたっても枯れる気配はない。

「今日は……、今日までは泣いても良いかな？明日は元気になるから……」

「ああ……」

アルトはリオンの言葉を聞くと、再び泣き出した。今度は静かに。声を押し殺すようにして。

リオンは遠慮がちに、彼女の肩に手を伸ばして引き寄せると、そのまま抱きしめた。

突然のことに少し驚いたアルトだったが、それをすんなりと受け入れ、身を預けた。

アルトが両親の無事を確かめるために家をあとにしてから、現在に至るまでどれほど時間がたっただろうか。

あの不気味な空は嘘のように晴れ、夕日が顔を出していた。

アルトはリオンの腕の中のことを思い出し、慌てて体を離れた。

「ご、ごめん！」

「いや……」

一瞬驚いたような表情をしたりオンだったが、アルトが体を離すと少し寂しげに横を向いた。

そんなリオンの姿をアルトは不思議そうに見つめ、首を傾げた。

ふと、思い出したかのようにアルトは立ち上がって、服についた埃を払う。破れているスカートの部分から、小麦色の肌が露出しているが、それを気にしている様子は全く見受けられない。むしろ、同じ丈にしようと、裾を引っ張って破るうとしているくらいだ。

「アルフェイス！」

リオンが慌てて彼女の手を止めると、彼女は再び小首を傾げる。そんな彼女を見て、リオンは深いため息をつくと、自身のマントを、アルトに羽織らせた。

「これでいいだろう？」

「……ありがとう。あれ？そつえばシャルは？」

「騒がしいから置いてきた」

無表情で酷いことを言うリオンに、アルトは一瞬驚いたがそれはすぐに笑いへと変わった。

「ね、エミリオ。私行きたいところがあるの」

「行きたいとこって？」

リオンのマントを嬉しそうに身にまとったアルトは、疑問の声を無視し、返答を聞かぬやいなや彼の手を引いて歩き始めた。

街の出口に向かって歩を進めている途中、リオンは何か言いたそうに幾度か口を開いたが、何の音も発せずにはそれは閉じられてしまふ。おそらく、繋いだ手のことを言おうとしたのだろうが、アルトがあまりにも強く彼の手を握っているので、観念したようにため息を吐き出した。

ダリルシェイドを出て街道に進み、アルメイダの近くまでやってきたアルトたちは、街に入るのではなく、近くにある森に足を進めた。

迷うことなく、目的の場所へ着いたアルトは、切り立った崖の近くで寝転び、空を見上げた。オレンジ色の光がアルトの瞳に飛び込んでくる。彼女は眩しそうに目を細め、隣に座っているリオンに視線を向けた。

「夢じゃ……、ないんだよね」

「……」

リオンはじつと前を向いたまま、口を開かない。アルトは視線を元に戻すと、ぼんやりと宙を見つめていた。

何分、いや何十分経ったのか。リオンがわずかに動き、腰にある剣の柄を握りしめている。彼女は不穩に思い、辺りを警戒すると複

数の気配を感じ取れた。

それは、少しずつだがこちらに近づいているような気がする。たぶん、もう囲まれてしまっただろう。アルトは心の中で舌打ちをして、警戒していなかった事を後悔した。

「エミリオ」

「……僕の側から離れるな」

リオンの言葉に、アルトは視線を向けず軽く頷く。それと同時に二人は素早く起き上がり、互いに背中合わせて剣を構えた。

「……バレちゃしようがねえな」

緊迫した空気が漂う中、木の陰から人影が現れた。無精ひげを生やした男で、右手にシミター、左手にはショートダガーを持っている。他にも似たような格好をした男たちが、草むらから飛び出してきた。短剣をちらつかせたり、長剣を鞘から抜刀している。

「僕たちに何の用だ」

「用があるのはお前じゃねえ。そこのお嬢ちゃんだ」

ニヤリ、と男は笑う。アルトは剣を持つ手に力をこめ、その男を睨みつけた。

剣はリオンと一緒に稽古していたので、彼と同じかそれ以上の腕前だ。だが、彼女の今の状態はとても不安定で、いつ剣先が鈍るとも限らなかった。

「私に何の用ですか」

「お嬢ちゃんには悪いが、始末しろとの命令なんでね」

男はそれだけ言うと、アルトに斬りかかってきた。他の者もそれに続くように奇声を上げながらリオンに突進していく。

「……まさかお父さんとお母さんを殺したのは!？」

アルトは男の剣を自身の剣で受け止めた。だが男の方の腕力が圧倒的に上なせいもあって、彼女の足はじりじりと後退させられてしまふ。

「さあな」

「答えてよ!」

それでも男の攻撃を流し、スピードを生かして懐に入りこむ。剣先を男の喉に向けて突き出すが、いとも簡単にショートダガーで弾かれてしまった。アルトは自身が知っている技を繰り出してみるが、全くと言っていいほど歯がたたず、体力ばかりが減っていく。

リオンも同く苦戦しているようで、数名を地に沈めているもの、すでに肩で息をしながら、このままだと追い込まれてしまっだろう。

「(どうにか、エミリオだけでも……)」

アルトは一端下がって体勢を整えると、再び男に剣先を向けた。息は上がっているが、彼女の瞳は目の前の人物を捉えたまま離さない。男はそんな彼女を見て楽しそうに笑みを浮かべると、一瞬で距離をつめてきた。

「させない!」

アルトの声と同時に、金属同士がぶつかった音が聞こえたかと思うと、彼女はすぐにバックステップで距離を取り、再び男の懐に飛

び込んだ。男もそれを見越していたようで、体を横に反らしてなんなく攻撃をかわし、今度は自分の番だと言わんばかりに、彼女の剣をたたきつけた。

「こんなもんか、嬢ちゃん！」

「くっ……」

アルトは男の攻撃を受け止めるのが精一杯で、反撃も出来ずにごんと崖の方へ押し寄せられていく。男は全く本気を出していないようで、アルトはまるで稽古をつけられているような感覚に陥り、苛立ちを隠しきれなかった。

「いい加減に……してっ！」

「おっと」

相手の剣を自身の剣で受け止め、力いっぱい押し返してから、アルトは素早く力を抜いて横に逸れた。途端に男はバランスを崩し、地面に手を突いたのを見て、彼女は剣を振り上げた。だが、それは相手の身体に掠りもせず、再び剣を合わせただけだった。

一瞬、アルトは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべたが、反撃してくる相手の剣をぎりぎりの所でかわすと、次の技を繰り出すために剣を振り上げた。

「くっ……!!」

だがその時、アルトの耳に苦痛の声が届いた。それは、先ほどまで彼女の心の支えになっていた人物から発せられていて、アルトは途端に身体を強ばらせた。

「エミ……リオ」

まるでスローモーションのように、リオンの身体は地面に叩きつけられていく。アルトは呆然とその光景を見つめ、振り上げた剣を降ろすことさえできない。リオンこそが彼女にとって今ではたった一人の理解者であり、友人であり、大切な人だった。

リオンを倒してしまえば、彼女の心に隙を生むのは簡単だった。

「よそ見してる暇があるのか？」

呆然と佇んでいるアルトを余所にして、男はシミターの柄で彼女の腹を殴り、突き飛ばした。苦痛の叫びをあげることもできず、体は宙を舞いアルトは崖の外に投げ出された。

「アルフィス……アルフィス!!」

血だらけの体を引きずりながら、リオンは彼女の名を呼び続けた。だがその呼びかけもむなしく、返事は返ってこなかった。

彼女が次に目を覚ましたのは、窓もない質素な一室だった。

3話 再会と予感 後編(後書き)

誤字・脱字・感想など頂けると、とても励みになります！

4話 新たな出会いと真実 前編

4 - 1

自身の体が宙に投げ出されたとき、彼女は死を悟った。それを受け入れるのも容易だった。むしろ望んでいたのかもしれない。

ゆっくりと写り込む景色の片隅に、ひどく驚いている表情をしたリオンがいる。彼女は、哀しげな表情で一言謝罪の言葉をつぶやくと、瞳を閉じた。

そしてそのまま、落ちていった。

白の世界、無音の世界。

“彼ら”は、そこで笑みを浮かべながら話をしていった。声は聞こえないので、何を言っているのかはわからないが、お互い楽しそうな表情を浮かべている。

アルトは彼らを見つけると、今にもこぼれそうな涙をこらえ駆け出した。だが、走っているはずなのに、距離は一向に縮まない。それどころか、どんどん遠のいているように見える。

『お父さん！ お母さん！』

アルトは声を張り上げたが、その口が音を発することはなかった。彼女は何度も何度も叫んだ。彼らがこちらに気づき、アルトの名を呼んでくれることを信じて。

「うわああー！」

ようやく聞こえた第一声は父の悲痛な叫び声だった。そして母もまた同じように声を上げ、地に倒れた。

「……い、いや……」

白だった世界は、二人の血で赤に染まる。

アルトは両手で顔を覆い、その場に崩れ落ちた。彼らを斬り捨てた相手は嬉しそうに声を上げて笑う。アルトは両親を斬った男を睨みつけると、肩を震わせ唇をかみしめた。その瞳に宿ったのは憎悪だけだった。

辺りを闇が包み込む。両親の姿も、男の姿も次第に見えなくなり、ついには彼女一人になった。

赤だった世界は、黒に変わる。そして彼女は闇に呑まれた。

「ここ、は……？」

次にアルトが目覚めたのは、一面が灰色の壁で囲まれている一室だった。窓はなく、彼女が寝ていたベットと、ドアが1つあるだけで、今が朝なのか夜なのかさえわからない。部屋を照らす灯りも心許なく、アルトは不安げに立ち上がった。

「つつ……!!」

立ち上がると同時に体に激痛が走る。アルトはそれに耐えきれずに片膝をついたが、懸命に痛みをこらえ再び腰を上げた。恐る恐るドアに近づき手を伸ばす。

「やめとけ。それ、トラップが仕掛けられてるから」

「!?!」

アルトは伸ばした手をすぐさま引っ込めると、振り返りながら剣の柄を握ろうとした。だが、いつもある場所にソレは存在せず、彼

女は心の中で軽く舌打ちをして、盆を片手に持ち笑顔を浮かべている人物を睨みつけた。

「……いつたはどこから来たの？」

「そんな怖い顔すんなって！ 隠し扉だよ！」

アルトよりも数歳上に見える黒髪の少年は、何も無い壁を指さし持っていた盆を床に置いた。そして、先ほどまで彼女が寝ていたベッドに腰を下ろした。軽くベッドを叩き、隣に座るよう促すが、一向に動かない彼女を不思議に思い小首を傾げる。だがすぐにああ、と納得した声を出し彼女の元へ駆け寄った。

「ほら、急に動くからだぞ」

「触らないで！」

少年は肩を貸そうとアルトに手を伸ばすが、すぐにはねのけられてしまう。苦笑いを浮かべた彼は、盆に置かれている食器に視線を向けると、それを取り出し彼女に差し出した。

「お腹、すいてるだろ？」

「いらぬ……っつ！」

アルトは少年の言葉を拒むと、苦痛に顔を歪めた。体が限界だと悲鳴を上げている。呼吸をするのさえ痛みが走り、これ以上抵抗し続けると、意識を保てるかどうかもわからない。だが相手が何者かわからないまま、倒れるわけにはいかなかった。

「……は……？あなたは……だれなの？」

少年はアルトの問いに答えることなく、じっと彼女を見つめ楽し

そつに口元を持ち上げた。

「ここは俺ん家。そして俺はエルフォードだ！エルでかまわないぜ」

エルフォードと名乗った少年は少し偉そつに鼻を鳴らし、彼女に背を向けしゃがみ込む。不思議に思ったアルトが疑問の言葉を投げかけると、彼は無言でその腕をつかみ、動けないであろう彼女を背負った。

「っ……！？」

あまりの痛みにも声を上げられないアルトを余所に、エルフォードはゆっくりと足を進めた。先ほどまで寝ていた場所に彼女を降ろし、持ってきた食事を口元に差し出す。だがそれに口を付けることはなく、彼女は顔を背けた。

「はあ……食べてくれなきゃ困るんだけどな」

「どつして」

「親父に言われたからだよ。鍛えれば強くなるから、うちの団に入れるって張り切ってたぜー」

酷いよな、俺もあいつもいるつてのに。エルフォードは最後にぼそりと付け足すと、再びアルトに食事を差し出した。

「……うちの団って？」

「盗賊」

エルフォードの言葉を聞いた途端、アルトは目を見開いた。盗賊団で、彼女の実力を知る者はあの時戦った男しかいない。手合わせをしていないのに、まだ幼い彼女を団に引き入れようなんて馬鹿な

事を言う奴はいないはずだ。

「まさかお父さんとお母さんを殺したのは……！」

アルトは目の前にいる少年につかみかかった。全身傷だらけで動くのさえ辛いだろうというのに、彼女はそれを全く感じさせなかった。きっと彼女が今帯刀していたのなら、その剣先は間違いなくエルフォードに向けられていただろう。彼は一人感嘆の声を上げると、胸倉を掴んでいるアルトの手を、無理やりどけた。

「それは俺の親父に聞くんだな」

アルトは、凝りもせず^{そっほ}に食事を差し出したエルフォードを鋭く睨みつけ、外方を向いた。

「食べないと、親父に会う前に死ぬぞ？」

真相がわからなくてもいいのかと、彼の瞳は語っているようだった。アルトは観念したのか、先ほどと同じようにエルフォードに視線を送ると、彼が持っているスプーンを奪った。

動かした右手が痛みを感じているが、それを堪え食べ始めようとした時だった。

「早く回復したいんだろ？俺が食べさせてやるよ。いや、寧ろここから食べないと親父に会わせない」

「は……？」

アルトが奪ったスプーンをエルフォードが再び奪い返すと、楽しそうに口角を持ち上げた。

彼の表情はからかっているのか、はたまた本気で言っているのか

読み取れない。間抜けな声を上げたアルトは、数秒呆けていたがすぐに眉をひそめた。

「意味が分からない」

「まあ大人しく看病されるって事だよ」

満面の笑みを浮かべたエルフォードを見て、アルトは深くため息をついた。どうもこの少年には調子を狂わされてしまう。おそらく、このまま拒否し続けても意味がないだろうと感じ取ったアルトは、エルフォードを睨みつけながら彼の手から食事を口にした。

「……あ、因みに親父はあと二週間くらい帰ってこないから」

もう少しで食べ終わるだろうという時に、エルフォードが楽しそうにアルトに告げた。ふてくされながらも大人しく食事をしていたアルトの表情が、みるみるうちに変わっていく。

「ふざけるな！」

「まあまあ、そんな怒んなって！」

彼女は、今にも殴りかかりそうな形相をし、エルフォードを睨みつけた。だが不思議と、先ほどの刺すような視線ではなく、それは和らいだものに変わっていた。

4話 新たな出会いと真実 前編（後書き）

誤字・脱字・感想など頂けると、とても励みになります！

4話 新たな出会いと真実 後編

4 - 2

「アルフィス、親父帰ってきたらしいぜ」

「今どこにいるの……？」

？あれから二週間が過ぎ、エルフォードのおかげでアルトの体も順調に回復していた。本調子とは言わないが、ここにいる下っ端共を簡単にあしらえる自信はある。

？アルトは、自分が盗賊団に捕らわれたと思っていたのだが、彼らは彼女を手厚く看病し、しかも剣を帯刀する許可を出した。

？体調が良い時はエルフォードや他の者が手合わせをしにやってくるという、仲間のような扱いに最初は戸惑っていた。だがそれはすぐに慣れ、両親を殺した人物は他にいるかもしれないと思い始めた矢先の帰還だった。

「嬢ちゃん、ここにいてるぜ」

？エルフォードがいるその奥から、大柄な無精ひげを生やした男がのっそりと出てきた。

「やっぱりあの時の……！」

？目の前にいる人物は、紛れもなくアルトと戦った男だった。

？彼女は抜刀しようと腰に手を添えるが、躊躇っているのか。なかなか剣を抜こうとしない。男は怪しい笑みを浮かべたまま、腕を組んでアルトを見据えていた。

？戦いを挑むのは、両親やリオンの事を聞いた後でも良いと考えた彼女は、ゆっくりと腰から手を離れた。

「エミリオは、無事？」

「あのチビの事か？ああ、無事だぜ」

？男のその言葉にアルトは安堵の色を浮かべた。ずっと安否が心配だった彼が生きている。それだけで、彼女の心が少し軽くなった。

？握り拳を作り、心の中で深呼吸を一つ。

？ずっと聞きたかった真実が、今明かされる。アルトは、男を真っ直ぐに見据え、口を開いた。

「両親を殺したのは……誰？」

「それは……」

「レイナー、私は殺せと命じたはずだが？」

？男が何か言おうとしたのと同時に、聞き覚えのある声がアルトの耳に届いた。自然と彼女の目はその人物に移る。

？冷たく響く声色、刺すような瞳。全てが、両親の死に場所で感じたものと同じだった。

「ヒュ」悪いな、こいつはお前が命じたやつじゃねえんだ。ちょっと似てるけどよ、男だ。アルトっていつて最近入ったんだよ」「

？ヒューゴ様、と最後まで言い終わる前に、先ほどまでアルトと対峙していた盗賊の頭、レイナーが、庇うように彼女を自身の後ろに隠した。

？さらにエルフォードとピスカが、未だに瞬き一つ出来ない彼女を押しつけて前へ出た。

？ヒューゴは嘲笑を含んだ目つきで周りを見渡し、静かに笑った。

「……まあ良い。この団員の者ならば、私の好きに使わせてもらう」

「いいな？」とヒューゴの瞳は語っていた。レイナーは何も言えず、ただ黙ったまま拳に力を込めた。
「エルフォードも、ピスカも動けない。皆俯いて床を睨みつけている。」

「アルトだけが、未だに口元を持ち上げているヒューゴを呆然と見つめていた。」

「仕事だ。詳細はこれに書いてある」

「懐から取り出した紙を机上に投げ捨て、ヒューゴは背を向けた。
「一度だけアルトを見て、楽しそうに笑みを浮かべる。」

「……君の両親を刺したのは私の部下だが、止めを刺したのは君もよく知っている人物だ」

「……よく知っている人物……？誰？誰なの！」

自然と出たアルトの言葉にヒューゴはさらに笑みを増した。
「今の言葉で、自分がアルフィスであるというのを肯定したようなものだ。だが今はもう彼女を始末する気はないらしく、手駒として最大限に活用するつもりなのか。彼女が今一番欲しい事実を明かした。」

「会っただろう？両親の死体を発見したその後」

「……う、そ、だ。嘘だ嘘だ嘘だ……そんなはずない！」

「両親が死んで、その後に出会った人物は一人しかいない。」

「ずっと安否を心配していた彼女の大切な友人。」

「泣いている彼女をそっと抱きしめてくれた人。」

「マントを差し出してくれた優しい少年。」

「エミ……リオ」

アルトの呟きはヒューゴをさらに醜く笑わせた。

？放心状態になった彼女は、そのまま崩れ落ちエルフォードとピスカに支えられた。瞳に涙を浮かべて、彼女は再び声にならない言葉を紡ぐ。

？エルフォードはそんな彼女を見る事ができず、力強く抱きしめた。ピスカもレイナーも黙って見ていることしかできなかった。

「君がアレを殺すのを楽しみにしているぞ」

ただ一人、ヒューゴだけが嘲笑を浮かべその場から去って行った。

？この後、「彼女」は、「彼」になった。少女だった「アルフィス」を封印して、盗賊団の主に付き従う残忍な少年「アルト」へと変わった。

？すべては真相を知るために。

4話 新たな出会いと真実 後編（後書き）

後書き

誤字・脱字・感想など頂けると、とても励みになります！

5話 とある人物からの依頼 前編

5 - 1

「アルト、仕事だ」

リオンと対面して数日後、エルフォードが封書を持ってアルトの元へやってきた。彼は執務室で溜まっていた書類と向き合っていたらしく、眉間にはしわが寄っている。

よほど書類を片付けるのに体力を使ったのか、いつになく疲れた様子で、机の上につ伏した。

ゴン、という鈍い音が聞こえたが、痛がっているそぶりは見えな

い。
そのままピクリとも動かずに小さく唸り、再び顔を上げた。

「……やだ」

アクアブルーの瞳が、もうこれ以上仕事をしたくないとエルフォードに訴えてかけている。

「今日の仕事はある程度片したのに」

アルトは横目で隣のテーブルを見て嘆声たんせいを漏らした。

懐中時計の針は既にお昼の二時を指していて、窓から降りそそぐ日差しはアルトの銀髪をより一層際立てる。

これから一息入れるところだったのか、隣のテーブルには紅茶が入ったカップと、アルトが好きな菓子がセットされており、湯気と共に、部屋中に甘い香りが充満していた。

「まあ、そう言うなって！ な？」

アルトはエルフォードの手元にある封書に視線を移すと、一瞬目を見張った。しかしそれはすぐに戻され、苦笑いを浮かべているエルフォードの側に行き、不服そうに封書を受け取った。

名前はどこにも書いていない。だが、裏にうつすらと刻まれたマークを見れば、誰が依頼者なのかは一目瞭然だった。

ため息を一つ零して封書を開き、カップに口付けながら視線だけを動かす。

「……へえ」

「なんだって？」

読み終えた手紙をエルフォードに差し出すと、先ほどまで腰かけていた椅子に再び背中を預け、不敵な笑みを浮かべた。それを読んだエルフォードは、アルトとは対照的に不安げな表情を見せ、手紙を返しつつ、彼の頭を小突いた。

「俺も行くからな」

「大丈夫だつて」

アルトは、叩かれた部分を押さえながらエルフォードを軽く睨みつけると、もう一度手紙を読み始めた。

『地図に記した場所に赴き、魔物の討伐、及び調査を依頼する』

内容だけが簡潔に書かれた手紙と一緒に、地図が同封されており、何も描かれていない場所に赤丸がついている。

そこはダリルシエイドの直線上、ストレイライズ神殿よりも北に位置する孤島で、地図にさえ載っていない小さな島だ。

その島が発見されたのは、三ヶ月ほど前の話。

幾度となく調査員を派遣しても無事に帰ってきた者はほとんどお

らず、運良くダリルシェイドに戻ってきたとしても、彼らの心は壊れていた。ある者は意味もなく笑い続け、ある者は謎の言葉を口にし続け、ある者は全てを恐怖していた。

何度問いかけても、彼らは答えない。何も口にせず、睡眠も取らず、生き方を忘れたように壊れた彼らはただ、そのまま朽ちていった。

そのせいで、あの島の調査は打ち切りになっていたはずだ。何故今頃になって再開するのかと、アルトの頭に疑問が浮かぶ。だが、目の前にあるモノを見て一人納得したように、再び口角を持ち上げた。

エルフォードもそれに気づいたようで、より一層眉間のしわが深くなる。

「お前の大丈夫は当てにならないから、俺も行く。だけどヒューゴの野郎、剣の力なら前回の依頼で試しただろ？ どうしてまた？」

「あれ、サンダーブレード撃った後にコアがイカれたんだよ。戻ってから気づいたけど」

「……だけど剣の力を試すだけだったのに、あんな島なんか」

「あんな島だから、だろ？」

アルトはいつものように手紙を散り散りに破り捨てると、机の上にある剣を取り鞘から抜刀した。

「数多あまたの血によって完成した偽ソーディアン、レイヴェルグ」

レイピアより太く、ファルシオンより細いその刀身は鞘と同じくほぼ全てが赤黒で、剣先は緩くカーブを描いている。唯一の光は刀身と柄の境目にあるコアクリスタルだった。

その部分が今は脈を打つように光を放っており、アルトはレイヴエルグを掲げ恍惚しんごうと見つめていた。

改良に改良を重ねられたソレは、力を試す度に血を浴びた。魔物や動物の血、もちろん、人間の血もだ。

改良する部分のコアを除き全てが赤黒なのは、恐らく大量の血をレイヴェルグが吸収したからだろう。

ソーディアンであるレイヴェルグを扱えるのは、その声が聞こえる者だけで、リオンが所持しているシャルティエの声が聞こえていたアルトは、ソーディアンマスターになれる素質の持ち主だった。

アルトがその剣を手にしたのは数年前の事だが、偽ソーディアンの研究はずっと昔、彼が幼い頃から行われていた。殺された両親もその研究に関わっており、研究チームの指揮を執っていたらしい。

「コイツをあの島で試して、俺が無事に帰れば、島の調査を王様に報告できる。帰らない場合は失敗作であるコイツと、自分を憎んでいる俺を始末出来る。どっちに転がっても、ヒューゴにはプラスになるって訳だ。俺が死んでも駒は大量にあるからな」

この状況をアルトは他人事のように楽しんでいる。

まともに調査報告もされていない島、しかも行った者たちすべてが正常な精神で帰ってきていないというのに、その笑みからは恐怖心が全く感じ取れない。

レイヴェルグを見つめるその瞳は、まるで戦闘を待ち望んでいるかのようにだった。

エルフォードは無言のまま拳に力を入れると、悲しげに目を伏せた。

その心境を察したのか、アルトは複雑な笑みを浮かべ剣を鞘に戻した。

「俺は大丈夫だよ」

「わかつてる……けど、本当はお前に……!!」

「エルは心配しすぎ。俺は大丈夫だって！ ほら、もう準備するか

ら部屋から出た出た！」

エルフォードの話が終わらないうちに、アルトは素早く立ち上がった。そして部屋から追い出すように背中を押して、入口まで連れて行く。

「ちょ……アルト！」

「あ、そうだ。俺たちがいない間の依頼、誰が担当するか振り分けてくれるか？」

わざとらしく話をすり替え笑顔を浮かべると、エルフォードは数秒黙ったあと声を絞り出した。

「……ああ、わかった」

「よろしくな。じゃ、また後で」

アルトは片手を上げて合図をすると、静かにドアを閉めた。

向こう側から小さく自身の名を呼んでいる声が耳に届いたが、聞こえないふりをした。

執務室に一人になったアルトは、去っていく足音を聞きながらドアに背を預け、背中を引きずるようにその場にしゃがみ込む。

深くため息をつくとき、膝を抱えて顔をうずめた。

都合が悪くなると逃げ出すようになったのは、いつからだろう。

エルフォードに、あんな顔をさせたのは、もう、何日目だろうか。

あの後に続く言葉はだいたい想像ができる。復讐なんかして欲しくない。

先日ピスカも同じことを言っていた。二人に言われ続けているその言葉は、いつもアルトの心を揺さぶる。

だが、復讐をやめるつもりは毛頭ない。やめてしまえば、真実が

うやむやになってしまう。

両親は確実に誰かの手によって殺された。それは紛れもない事実だ。アルトはただその人物を見つけて、真実を問いただしたあと、同じ目に合わせてやれば良い。

ずっとそう思い続けているのに、やはり心のどこかで何かが引っ掛かっている。

「それでも……俺は」

顔を上げ、短くため息を吐く。

「やめるわけには、いかないんだ」

アルトは窓から注ぎ込む太陽の光に目を細め、心の中で謝罪の言葉を口にした。

5話 とある人物からの依頼 前編（後書き）

お久しぶりです。

なかなか更新できず申し訳ありません。

ですが、書き続けてはいますので、読んでくださっている方、これからもどうかお付き合いください。

ほとんどオリジナルになっていますが……リオン登場してないしね！
頑張りますっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5761t/>

BittyHeart

2011年10月6日20時31分発行